
悪役上等！ 武装戦闘国家ゼクトール

アズマダ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

悪役上等！ 武装戦闘国家ゼクトール

【Nコード】

N0753Z

【作者名】

アズマダ

【あらすじ】

もしも、高校生が絶対君主制国家の国王になったとしたら？

そして、国民における女の子率が、異様に高かったとしたら？

さらに、国民の生与奪権が国王にあったとしたら？

そのうえ、主人公を補佐するのが幼なじみの少女で、その子が暗躍しまくったとしたら？

あまつさえ、その国が滅亡の危機に瀕していたとしたら？

その危機を救えるのは？

――し、まじめにいつてみよう！

1・二ホン

序・

白い指だ。

細くてしなやかな少女の手が、白い砂に埋もれかけた写真を拾い上げた。

端が焼けこげた大判の写真。

細くて華奢な少女の手が、白い埃を丁寧に払いのける。

どこかぎこちない笑顔で収まる、十一人の集合写真。

中央に映っているのは、夏の制服を着た少年と少女だった。

1・二ホン

「ちよつと桃矢！」

怒りにまかせた幼馴染みの声と共に、A4サイズの雑誌を入れた紙袋が、桃矢の後頭部に直撃した。

芦原桃矢は、言い返したい言葉を飲み込んで、頭を抱えうずくまる。おさまりの悪い毛が一本、指の間から飛び出して左右に揺れていた。

「デートしてた女の子に対して、何も言わずに先に帰るってどうよ？　それでも健全な高校生？　十七歳男子？」

雑誌を拾い上げ、砂埃を丁寧に払い落とした後、騎旗桃果きはたもかは不平を口にした。

「デートって、……桃果ちゃん。学校の帰りに寄った本屋でフランカーの特集号を食い入るように立ち読みしてたのは誰ですか？ ロシア製新鋭戦闘機を穴が空くくらい眺めてるだけのデートなんて初めて聞いたよ」

アドレナリンが誘発した汗が、桃矢の額を濡らす。汗を拭う手が、意図的に長く伸ばした前髪をかき分ける。髪の間から大きなホクロが顔を出す。綺麗な五角を持つ星形の珍しいホクロだ。

ホクロが空気に触れたことを察知した桃矢は、慌てて前髪を下ろす。

「お！ 桃矢の恥部を見るの久しぶりね！」

桃矢は、嫌そうな眼で桃果を見上げる。

夕方とはいえ、まだまだ力を保ったままの太陽。その陽光を背にした桃果は、光の中にいた。

夏の制服がよく似合う桃果。スカートのプリーツを透かして、形よい足が見える。

桃果は無邪気に笑っていた。

何物にも代えがたい輝きの笑み。このかわいい笑顔を見たいが為に、同年代の男共は身の程を超えた努力にいそしむのだ。

生まれたときからの付き合いを誇る桃矢でも、時々だまされなくなる太陽のような笑顔。

道行く十人が十人とも振り返るほど可愛いんだけど……中身を知ってる桃矢は素直な反応をよこさなかった。

「戦闘機の写真集だから痛かった？」

背中まで伸ばしたサラサラの黒髪を指ですくい上げる桃果。

いまだ痛み of 引かない頭頂部を片手で押さえている桃矢。

「写真は鉄の塊のを撮ったんだろうけど、媒体は紙だからね」

「じゃ、痛くないわね。さ、帰る帰る！」

話は済んだとばかりに、ズカズカと歩を進める桃果。

桃矢には、そのいい加減さに思い当たる節があった。

「桃果ちゃん。ご両親さあ……」

「言わないで！」

先程までのおどけた空気がない。桃果は、ぴしゃりと桃矢の言葉を封じた。

桃矢は肩をすくめてから歩き出す。桃果も、無かったことにして先を歩いている。

毎日の毎回の繰り返し。いつの間にか、いつもの終わりが始まっている。

角を曲がれば桃矢の家。向かいは桃果の家。

角を曲がれば……。

「あれ？」

「なによ？」

曲がったとたん、桃矢が立ち止まる。芦原家の前に止まった、黒塗りの大型車が一台。

車の周りには、ガッチリした体格かつ黒服の男達——ならぬ、グレーの制服が三人。

「軍服……のコスプレ？」

桃矢の頭の中をいろんなアニメ雑誌記事が、回り灯籠のようにゆっくり回転している。が、見覚えのないデザインだ。

灰色の男達の背後から、四つめの影が現れた。同じデザインの軍服を着ているが……。

線が細い。

桃矢と同一年であろうと思われる、背筋を伸ばした美少女が、七分の構えで立つ。

後ろになでつけた短い金髪は絹のように細く、アイスブルーの目が底抜けに冷たい。

どのような混血の結果か？ きめの細かい浅黒い肌が、彼女の人種を複雑にしていた。

「トーヤ・アシハラ様……ですね？」

「は、はい」

それを合図に、男の一人が車の後部ドアを開ける。と、同時にエンジンがかかる。

これはまずい。大変まずい展開だ。桃矢の脳裏に「拉致」の一言が浮かぶ。

「初めまして。わたくしミウラ・ヴァイツと申します」

肩パット入りの制服とタイトミニが、凛々しくも美しい。

「事は急ぎます。トーヤ様、我らとご同行願います」

両脇を灰色の男達にガッチリつかまれた。万力で腕をはさまれた感覚。もがいてみるが微動だにしない。

「ちょっと、あなた達誰よ？ ここは法治国家日本よ！ 最近この近くで誘拐事件があつてね。この辺、警察のパトロールが頻繁なのよ！」

桃矢と車の間に立ちふさがる桃果。こういう時に機転の利く、頭の回転が速い子だ。彼女を頼もしく思う時点で、男失格だなと思う桃矢。

敵つい男が、丸太のように太い腕を伸ばし、桃果をよっこらせと脇へ退かす。

ミウラと名乗る少女は、微笑みもしなかった。

桃矢は、鏡で自分の顔を見なくなつた。我ながら情けない顔をしているだろうと思う。

「だめよ！ 桃矢はこれからあたしと百里へ、イーグル見に行くのよ！ 先約よ！」

「そんな約束してないって！ 僕は軍事オタじゃないから」

桃矢とミウラの両方から無視される桃果。だが、負けない。

再び、前に回り込む。

「これを見なさい！ このひもを引き抜くと警報が鳴って警察が大挙して押し寄せてくるわよ！ そうならないうちに桃矢を離しなさい！」

桃果が持っているのは白い携帯と、訳あって表現できないが、世界一有名なビーグル犬のストラップ。引き抜いたところでブザーは鳴らない。お子様携帯であるわけでなし、もとよりそんな機能はついていない。

ミウラはまじまじと桃果を見つめている。

「さあ、どうするの——あ！」

桃果の携帯は、手首のスナップを利かせたミウラの猫パンチではたき落とされた。

「ああつ、ちよつと！」

嫌な音を立てて落下した携帯を拾い上げようと、慌ててしゃがみ込む桃果。

「ああああ、ちよつと！ ちよつと！」

一方、宙ぶらりんになつた桃矢。抵抗虚しく、コンパクトに車の

中の人となる。

と、窓の外に母の姿を見た。

「お母さん！ 助けて！」

車の中から大声で叫ぶ桃矢。

偶然か神の思し召しか。うまい具合に母と視線が合った。

「行つてらっしゃい。体につけるのよ！」

笑顔で送り出す母。手を振っている。

店の奥から、父が姿を現した。

「父さーん！ 助けてー！」

ウインクしながらサムズアップする父。キラリと光る白い歯がとてもダンディ。

「どういうことーっ？」

桃矢のいつもの日常は、あっけなく幕を閉じたのだった。

有無を言わず空港へ。国際線の大型ジェットに乗ること十数時間。

さらに、一回り小さいジェット旅客機に乗り換えて数時間。もう一度乗り換えた三十人乗りのプロペラ機が水平飛行に移った時、たまらず桃矢が口を開いた。

「あの！ 僕どうなっちゃうんでしょうか？」

対して、大きく目を見開くことで答えるミウラ。

「どうって……トーヤ様、なにがどうなのでしょう？」

桃矢は理解した。話が噛み合っていないのを。

「何で僕が拉致されなきゃならないんですか？」

ミウラは微かに口を開いて動かなくなった。目の光も鈍くなっている。

桃矢が待つこと十数秒。状況を判断しおえたのか、ミウラの目に再び明かりが灯る。

「ひよつとしてトーヤ様、ご両親からは何も聞いておられないのでしょうか？」

自分のことを「様」付けで呼んでもらっているところを鑑みるに、可及的速やかな危機はなさそうだと、なると、桃矢にも、ある種の感情が自然発生する。

ズバリ、その名は怒り。

「だから、何が何だか解らないから聞いてるんですって！」

「アイヤウエイ！」

母国語であろうか？ 聞いたことのない単語を口走り、左手を額にあてるミウラ。なにか重大な齟齬をきたしたらしい。

ミウラは居住まいを正した。

「トーヤ様。数々のご無礼お許し下さい。改めて全てをお話しいたします」

一旦言葉を句切り、ミウラは視線を前後左右に素早く走らせる。その仕種につられ、桃矢もキョロキョロとあたりを見渡した。

いつの間にか、灰色の大男がいなくなっている。その代わり、不自然な人が増えていた。

アロハシャツを着た人の良さそうな老人が、紙コップに入ったコ

ーヒーをすすっている。新聞を広げる背の高い婦人。居眠りする老婆。難しい顔をして窓を睨んでいる中年女性。

人種はバラバラだが、ミウラの軍服を気にしている人は一人もない。

これはっ、全て同じ穴のムジナっ？

「我らが母国の名はゼクトール。ゼクトール王国と申します」
姿勢の良いミウラがさらに姿勢を正す。

桃矢は、初めてミウラを正面から見据えることになる。小さい顔。日本人離れした美しき風貌。……日本人ではないが。

威風堂々としたその態度、とても同年代には見えない。

桃矢はミウラの瞳の色、アイスブルーが、色に等しい温度をもったように感じた。

「トーヤ様はゼクトールの次期国王なのです」

この間、きっちり三秒。

「はい？」

いまいち、よく聞き取れなかった。

「トーヤ様は、ゼクトール民主主義国前国王ゼブダ・バルギトル・ゼクトール様の跡継ぎなのです」

「えーと、……いい病院紹介しましたか？」

「言い直しましょう。前国王が身罷られた今、トーヤ様が次期国王に決まったのです」

「なんですとおーっ！」

前の席から身を乗り出して叫んだのは桃果であった。

1・二ホン（後書き）

今回、そんなに深く考えていません（w）
女の子も、百万人は出てきません（笑）
全40話程度の予定です。

2・ゼクトール

「な、なんで桃果ちゃんが？」

桃矢は自分の身の上話より、桃果が、今ここにいる事に強く疑問を感じている。

「るっさいわね！ そんなことよりあなた、ミウラ！ 続きを早く話さないよ！」

目を大きく見開いたまま、しばし動揺を隠せないミウラ。その間のミウラは年相応の顔をしていた。ついでに言うと、周囲の一般人らしき人々も中腰になっていた。

ミウラは、桃果の気迫に押されるようにして話を続ける。

「ゼクトールの前国王には、お子様がございませんでした。つまり、息を引き取られた時点で、王家の直系が絶えてしまったのです。傍流のお血筋で、王位継承にもっともふさわしい条件をそろえておいでなのがトーヤ様なのです」

桃矢の感覚は麻痺していた。理不尽な出来事に続いて、極度の緊張を持続させたためか、情報の入り口が狭くなっていたのだ。

桃果の手が伸びたのに気付かない。そつと伸びた桃果の小さい手が桃矢の額をさわる。そして、桃矢の伸びた前髪をかき上げた。

「これね？ この星形のウルトラビームね？」

「いや、あのね桃果ちゃん——」

こういう我に返りかたは嫌いだった。

「それです。ゼクトール王家の血を濃くひく方々に、たまに現れる遺伝上の特徴です。星形のお印を持つ方が、最も初代に近いと言われています」

桃矢のデリカシーなど問題外の事らしい。

「でもさ、僕は日本人顔だよ。両親も日本人だし、両方のお爺さんお婆さんも日本人だよ」

桃果の手を乱暴に払い、前髪を元に戻す桃矢。

「第二次世界大戦末期、我が祖国ゼクトールへ侵攻した日本軍が、両国親善のためと称し、王家の姫君、キリア・ウハウハ・ゼクトーラ様を日本へ連れ去られた。その姫様がトーヤ様の曾お婆さまでございます」

「さすがに三代前は聞いてないな。……つか、そんな話が本当にあったらマスコミが喜んで大騒ぎしてるよ!」

笑顔を浮かべようとしたが、頬が引きつっただけだった。

「その部隊が目的不明の秘匿部隊であったこと。部隊が撤退中に、連合国軍の攻撃で壊滅的打撃を受けたこと。生き残りが姫様を託した輸送部隊に、トーヤ様の曾お爺さまがおられたこと。そのあと、生き残りの方々が、姫君を落ち延びさせるため特攻攻撃を掛け、全滅したこと。等々、いろんな事が重なり、表に出ない史実として闇に埋もれていたのです」

一般人を装う乗客達は、普通の乗客に戻っていた。ただ皆、一樣に沈痛な面持ちであった。その事が、マシーンになりきれない彼らの国民性を物語っているのかもしれない。

「隔世遺伝ってヤツ?」

桃果の問いに、うなづくミウラ。ミウラの瞳は力強い光に満ちていた。しかし、今までとは違った光。強い忠誠心に満ちあふれた従順な家臣のもの。

「ふっ！ 仕方ないわね」

まったく、桃果は空気を読まない子だ。桃矢はいらだちを覚える。恐れ以外の感情が桃矢に現れた。それは周りを見つめる余裕ができた証拠なのだが、彼は気付かない。

「わたしが桃矢王朝の為に一肌脱いでやろうじゃないの。で、どこよ？ ゼクトールとかいう国の場所は？」

腕を組んで鼻から荒い息を吐く桃果。口をあんぐりと開ける桃矢。

桃果はこの状況を受け入れている？ なにゆえ？

「えーと、桃果様でしたわね？」

元の冷たいアイスブルーに戻ったミウラ。警戒心を露わにした言葉は冷気を帯びている。

「桃果様は、早々にお帰り願います。ご近所の幼馴染みというだけでは、おつきあい願えません。第一、ご両親が心配なされているでしょう。お電話でもなさいますか？」

ニコリともしないミウラ。ごつい携帯を桃果に渡す。恐らく軍用と思われる。

「大丈夫！ そんな必要ないわ！」

腕を組み、傲然と笑っている桃果。頭が天井へ付きそうになるところを見ると、座席の上に立っているのだろう。

「だ、だめです、それでは理由になりません！ ご両親と、よく話し合ってください！」

眉間に皺を寄せ、困った顔をするミウラ。何にこだわっているのか。

「いいのよ、あんな連中！」

「家族は大事にしなければなりません！」

桃果の言葉にミウラが即反応した。反応の早さに桃矢が驚いた。ミウラの絡みようは、道徳心だけから来るものとは思えない。酷く真剣な眼差しだ。

「あたしに家族はないの！ あたしの両親は離婚したの！」

ミウラの動きが止まった。

新聞を読んでも人も、コーヒーをすすってる人も、動作を止めている。

機内の空気が堅くなった。

「夕べ離婚届に判子を押したわ。あたしが立会人よ！」

「やっぱりだめだったの？」

家は隣同士、高校は一緒。桃矢は、ある程度の成り行きを知っている。お人好しの桃矢は、自分の身に降りかかる不幸を脇に置き、桃果の今後を心配している。

「お父さんもお母さんも、家や家族を守るつもりなんて、最初からこれっぽちも無かったって事よね。やっと家族が終わったって。そんなこと言ってた」

いつものような、明るい笑顔を見せている桃果。

桃矢の目には無理をしている様に映る。こんな場合、どう声をかけてやればいいのか？

「親御さんは子供のことを、あなたを必ず愛しているはずです！」

だから、諦めずにもう一度お話しすべきです！」

言葉を紡いだのはミウラだった。

クールビューティは眉を寄せていた。なにゆえか、ミウラは桃果の家庭を心配していた。

「親を好きにさせてやるのも子供の愛情よ！」

指を一本立て、チチと左右に振る桃果。

「しかし——」

家族にこだわるミウラを桃果が遮る。

「あたしは、絶対に家族を守りきる大人になるわ！ 死ぬまで家族を終わりにしない！」

太平洋高気圧のような凄みのある笑み。桃矢の目には、それが痛々しく映った。

「ところでミウラさん？」

桃果は座席から、いきおいよく飛び降りた。

「あたしは騎旗桃果。彼は芦原桃矢。二人とも名前に桃が付いている。なぜだかわかる？」

桃果は話の方向を意図的に反らしている。ミウラのアイスブルーに興味の色が浮かんだ。

なぜだか？ と言われても説明に困る。大それた理由などないからだ。じつは、先に生まれた桃果の「桃」の字を気に入った桃矢の母が、こじつけで付けた名前だったのだ。

「我が騎旗家は明治の御維新からこっち、ずっと芦原家嫡男の護衛を務める家柄なの！」

いや、いやいやいや。芦原家が先祖伝来住まいしていた土地に二十年前、騎旗家が越してきたのだし、次男の桃矢は嫡男じゃない。兄が一人いるし。

そんな関係は成立しない。

「十七年前に星形の水ク口を額にもって生まれた男の子。偶然同い年に生まれたあたしと桃矢は等しく育ち、等しく教育を受けてきた。それはね、桃矢の考え方を理解し、力添えをする為よ。いわば、あ

なた達とあたしは同志なのよ！」

二人は同じ年だし、同じ高校に通って同じ教科書を持っている。桃果の言葉に嘘はない。嘘は言っていないけど、本当のこととも言っていないパターン。

さすがに桃果を見てられなくなった桃矢。ミウラの顔色をうかがった。

彼女は目を見開き聞き入っていた。意外と素直な少女である。

いやいやいや、腐っても軍人……腐るほど年取ってなさそうだが……、そんなフェイク、ミウラが信じるわけないだろう？

「どうかご協力お願いします」

頭を下げるミウラ。白く固まる桃矢。

「任せなさい！」

ますます鼻息が荒くなる桃果。そこそこに豊かな胸を反らしているのだった。

2・ゼクトール（後書き）

さてさて、話が走り出しました。

ついでにポチッと評価ボタンを押してください。

3・コバルトの海

「ところで、ゼクトールって王制を敷いているところから見て絶対君主主義国家？　ねえ、軍事国家でしょ？　戦闘機は何を採用してるの？　ミラージュ？　それともF？」

たたみ掛ける桃果に押され気味のミウラ。

「えーと、ミグ——」

「あーそっち系ね、はいはい！　小さい国特有ね。いいわいいわよ、あたし向きよ！」

桃矢は、あきらめ顔で飛行機天井を見上げた。

やれやれ、どこでも桃果ちゃんなわけで……、でも桃果ちゃんのおかげで気持ちが軽くなった。

冷静に考えると桃矢の立場は低くない。余裕じゃん！

そこまで考えが及ぶと、俄然、桃矢の中に怒りが込み上げてきた。

「僕は国王を引き受けるなんて言っただけよ！　第一、僕の親が黙ってない！　今頃警察沙汰になってるよ。へたすりゃ国際問題だ！」
大声を出す桃矢。対して、らしくない顔をするミウラ。彼女に対するスマートなイメージがどんどん崩れていく。……これ見よがしな桃果の舌打ちは、聞かないフリをする。

「ご両親からは許可をいただいてますが？　当然、理由はご存じでしたし」

「あれ？」

ちよつと、……こう……期待していた答えと違う。

「僕に電話貸して！」

母から帰ってきた答えはこうだ。

『あれ、言つてなかったつけ？ でも、ミウラさんっていい人ですよ？ かわいいし』

「父さんに代わって！」

『父さんだ。思ったより早かったけど、まあいい。男はいつか旅立つものと相場は決まっている。盆と正月には帰ってこいよ』

桃矢は電話を静かに置いた。世にも情けない顔をして振り返る。

「もちろん日本政府にも、外交的に話がついています」

ミウラがとどめを刺した。

もうだめだ！ 膝を抱えて、床にうずくまる桃矢。

「可哀想に」

優しく桃矢の頭を撫でる桃果。目にいっぱい涙を浮かべて桃果を見上げる桃矢。

……桃果は嬉しそうに笑っていた。

「トーヤ様、どうかご安心を。トーヤ様が思っておられるような責務を我らは求めておりません」

初めて柔らかい笑みを浮かべるミウラ。

「は？ はあ？」

「ええーっ！」

腑抜けた声を出す桃矢と、あからさまに残念そうな声を上げる桃果。

「いわば素人のトーヤ様に、今までの生活を捨てて王になれと申し上げるのも、それは無理な話。我らとて重々承知しております。これはあくまで形式的なものです」

まずは桃矢を安心させるため、結果を先に言うミウラ。

「ゼクトールは今、問題を抱え込んでおります。といっても、トーヤ様がお氣にかけられる類の問題ではありません。政治形態に王制を採るゼクトールといたしましては、政府首脳部が案件を解決するにあたり、仮初めとはいえ国王が必要なのです」

ミウラは、一息ついて桃矢達の様子を見た。ツバメの雛のように口を開けている桃矢と桃果。上々な結果である。

「トーヤ様におかれましては、ゼクトール政府の機能回復のため、いくつかの案件の承認と権限委譲に同意していただだけで結構です。それもたった二日間。ご迷惑はおかけいたしません。合間に、郷土料理や名所観光などでお楽しみいただければよろしいかと」
固い笑みをぎこちなく浮かべるミウラ。

「いわば、機内移動時間無視のゼクトール国王体験一泊二日の旅をご満喫！ って解釈で良いのかしら？」

ミウラの説明に納得いったのか、桃果が合いの手を入れる。

「はい、正にその通りでございます！」

今度こそ、心底につこりと微笑むミウラ。年相応の笑顔。とても可愛かった。

しかし――。

「冗談じゃない！ そんな一方的で理不尽なナニに付き合うほど僕は暇じゃなキユ！」

「キユ？」

細い眉を寄せるミウラ。

そこには、後ろから桃矢の首に腕を絡ませた桃果がいた。
立ったままのネックブリーカー。容赦ない事で有名な技だ。

「で、ゼクトールって何処にあるの？ 教えてちょうだい」

桃矢のことはさておき、気さくに話しかける桃果。

ミウラは桃矢と桃果の眼前で紙を広げた。それは世界地図だった。落ち込んでいても始まらない。桃矢は、逃げ出すための情報収集のつもりで覗き込む。

「ここです」

ミウラが指し示す場所は、赤道からちよつとだけ離れた海。――の真ん中にある、針で突いた傷のような小さい島。

「えっ！ ええーっ！ 島国？」

頭を抱えたのは桃矢。ありとあらゆる大陸や半島や島から離れるだけ離れている。まさに絶海の孤島。陸、海、空路での単独脱出は不可能。

「拡大図はこう」

ミウラがもう一枚の地図を広げる。

ほぼ円形の島から西に一本、岬が張り出している。一言で表現するならフライパン。

それと柄の延長線上に小さな島が一つ。

「こつ、これは……屋久島より小さい？」

桃果も会話に窮し、眉をひそめていた。

「でもさ、なんでこんなへんぴな……もとい。ちいさな国の姫様を旧日本軍が？」

桃矢、当然の疑問である。

「真の目的は計りかねますが、我が国で戦局に係わる何かを発見したらしく――あっ！ 見えてきました。あれがゼクトールです！」

ミウラが、顔を輝かせながら窓の外を指さす。桃矢は、指された景色を見るついでにミウラの表情を盗み見た。故郷を見るミウラ。子供ばい顔をしている。

「うわっ、ちよーすごっ！ ヤバイくらい綺麗！」
桃果の歓声に、桃矢ものぞき込む。

コバルトブルーの中にエメラルドをちりばめた海。そこに浮かぶ緑の島。

陽の中の陽、光の景色が広がっている。

「美しい！」

あまりにも現実離れた美しい景色がどこまでも続いていた。

結局、ゼクトール本国に降り立ったのは、拉致られてから一日以上経ってからだった。

3・コバルトの海（後書き）

お気に召しましたら、軽く評価ボタンを押してください。
軽く。

4・水着

底抜けに青い空。暖かいを通り越した、あきらかに熱帯性の気候。やんわりとした風に漂ってくるのは潮の匂い。

暑い。いや熱い。

ガラガラという擬音でしか表現できない、強力かつ容赦ない太陽光が恨めしい。緩やかな風が吹いてなかったら、とても立ってなどいられない。

空港は立派だった。

旧日本軍が作ったという、大型旅客機も発着可能な滑走路が一本。一本だけ伸びていた。

随分金がかかっているらしく、夜間発着も可能とのこと。

後は小屋が一棟と、てっぺんに吹き流しを一本揚げた管制塔がそびえ立っているだけ。

移動時間と時差の加減もあるのか、ここゼクトールは、朝の早い時間帯だった。

「ビバ、南海の孤島」

桃矢の歓声は生ぬるかった。ご陽気な単語に反比例して、勢いがない。

一日程度の再会なのに、久しぶり感の地面。よく日に焼けたコンクリートの感触を通学靴の底に感じながら、桃矢は大地を踏みしめた。

目の前に広がるこの光景。桃矢は似たような光景を何度かテレビで見た記憶がある。

外国から要人を迎えるときの、あの光景。あの式典。
出迎えの音楽隊が、ゼクトール国歌らしき、のんびりした調べを
演奏している。

「常夏のー、国、ゼクトオルー。南海いにいー、浮かぶ島あー」
桃果が即興で詩を乗つける。四拍子で構成された実に平和な国歌
だ。とても桃果が主張するような戦闘国家には見えない。

が、なにか違和感を感じる。

「なに？ やっぱ暑いから？」

楽団員は、全員女の子。中学生くらいか？ まあ、それはそれで
アリだろう。

問題としているのは服装だ。上半身は白いセーラー服。まあ、こ
れはこれでアリだろう。

解せないのは下半身。スカートもズボンもはいてない。
全員ハイレグの白い水着。……と、白のブーツ。

この地方の風習なのかもしれない。なにせ暑いからね……周りは
海だし。

桃矢は結論づけた。これは南国ゼクトールの風習だ！

ハワイの空港で出迎えてくれるお姉ちゃんは上半身ビキニの水着
じゃないか。なら下半身水着の国だってあるはず。ワンピースの水
着つてのが健康的じゃないか！ いやあ、ゼクトールってさすが南
国だなあ！

……なわきやねえだろ！

桃果はどう受け取ったのだろうか？ 後ろを歩いているはずの桃
果を振り向く。

目が……、桃果の目がわずかに細められていた。細めた猫の目に似た形。

だめだ！ 完全にゼクトールを気に入っている。

これは…… 桃果を置いて、一人脱出という選択肢も。…… あるいは。

そんな風に考えていたら、桃果が手を握ってきた。

色っぽい握り方ではない。あえて言うなら手錠的な握り方。

桃果の顔を覗き込んだ。逃げたらコロスと彼女の目が言ってる。

「ゼクトール王宮へ向かいます。この国の重鎮達が、首を長くしてトーヤ様をお待ちいたしております」
よぼよぼの爺様が運転する、オールドファッションのリンカーンに押し込まれる桃矢達。

沿道には大勢の人が繰り出していた。手に手にゼクトール国旗と日の丸が握られ、ハゲシク振られている。熱烈な歓迎である。

桃果は嬉しそうに手を振り返していた。

「ほら、桃矢。ボサツとしてないで手を振ってあげなさい！」
気乗りしない表情で手を振る桃矢。ボーとしていた桃矢だが、ふと気付いた。

道々で旗を振る人々。日本の夏とそう変わりない服装。桃矢と同世代の女の子が、黄色い歓声を上げている。一人や二人ではない。三桁に上る数だ。

桃矢の集中力が、ピーキーかつクイックレスポンスで上昇した。あらためてよく観察すると、グラマラスな大人のお姉さんも多数混じっておられた。

旗を振るたび、揺れるバスト。ワンアクションごと、くねるヒップ。柔らかそうな太股。

……いや、健康的な意味で。

水着を着ている女の子はいないが、みな薄着である。暑いから当然だ。

俄然、男前の顔をする桃矢。手の振りも、きびきびとしたものに変わる。

……いや、健康的な意味で。

視線を感じて振り返ると、桃果のニヤニヤ笑いがあった。

これはまずい！ このままでは、しめしがつかない。

「いや、ほら、別に国王になることを認めた訳じゃないからね。だってこんなに歓迎されて、いい加減な態度できないでしょ？ いや、健康的な意味で！」

たまらず桃果が噴きだした。桃矢の沽券が回復するのは、遠い未来のようだ。

一分二十五秒のドライブが終わり、運転手がプルプルした手でドアを開ける。

降り立った先に構えているのは白亜の――。

「ここがゼクトール王宮です」

「まあ、予想は付いていたんだよな」

ミウラが案内してくれたのは、築五十五年、木造二階建て。

白の剥げかけたペンキを基調とした外観に、いろいろと飾り的な装飾が施されている。

田舎の村役場より、よっぽど金のかかった建物だ。

ありていに言って、桃矢が住んでいた土地の市役所より劣る。

「間を取って町役場だな」

桃矢は、なにもバツキングダム宮殿やノイシュヴァンシュタイン城を想像していたわけではない。が、やや撫で肩姿勢で歩いていた。

「お城ってイメージじゃないわよね？」

桃果も、同じことを言いながらミウラの後について歩いていく。

「狭いながら、王宮には美術館や図書室、卓球場などが入っております。もちろん、各行政機関も全て収納しています」

「卓球場の意味が解りませんが、なるほど立派ですね」

「ありがとうございます。では、ゼクトール政府の重鎮達を紹介いたしますよう！」

王宮玄関先で桃矢達を出迎えたのは、水着姿の九人の女の子達。

「えーと……」

言葉に詰まっているのは桃矢だけではない。桃果も黙り込んでいる。むしろ、声を出せたただけまだましである。さすが男の子。

ゼクトールは混血が進んでいるのだろつ。いろんな人種が混じっているようだ。

その中で、黒縁眼鏡をかけた、一番背の高いお姉さんが一歩進み出た。

「わたくしはジェベル・オルブリヒト。日本では総理大臣に当たる宰相を勤めさせていただいております。トーヤ様は戴冠式を済ませておいでではありませんが、事は急を要します。トーヤ様のお立場は、これ以後、事実上の国王であらせられます」

明るいブラウンの髪を後ろに流した大人のお姉さん。透けるように肌が白い女の人。背が高く胸が大きい。くびれたウエストに張りのある腰部。目の置き場にやたら困る。

「よろしく願います、トーヤ様」

「あ、よろしく願います」

後頭部をガリガリ搔く桃矢。アガっているのは火を見るより明らか。

しかし、一国の首相にしては若すぎないか？ 若作りをしているようには見えないが。

「失礼ですが、ジェベルさんはおいくつですか？」

堂々と女性に年を聞く桃矢。

「二十四才です」

にこやかに答えるジェベル。やはり若い。若すぎる。

これを機にしてゼクトール政府重鎮達の自己紹介が始まった。

「国土交通委員長のエレカ・フリフラ！ 今年で十八っス……です！」

ショートの黒髪と漆黒の瞳が白い肌に映える。

つぎの子は、無言で頭を下げただけだった。青白い髪がゆらりと揺れる。

「あ、この子は文部科学委員長のミラ・ロコモコ。十七才。ほんと無口で困るよね」

ミラの頭を平手ではたくエレカ。はたかれているのに、まったく無関心顔のミラだった。

「農務委員長を拝命しました、ノア・モフモフ、十三才です」

長く垂らした三つ編みが可愛い。身長も胸も小さいながら引き締まった体つき。

「ががが、外務委員長のサラ・プワプワ、十三才です。よよよ、よろしく願います」

おかっぱ頭で、接触感覚が柔らかそうなイメージの幼児体型。

以後、十八歳の商務委員長ジムル。十六歳の財務委員長マープル。十五歳の法務委員長アムル、と続いていく。

ニコニコしている桃矢だが、実のところ、内心、ものすごい疑念が渦巻いている。

居並ぶ委員長達の共通点を桃矢は発見したのだ。多分、桃果も気付いているだろう。しかしこれほど聞きにくいものはない。

「そして最後に、国防委員長を務めさせていただきます、ミウラ・ヴァイツ。十七才です」

ミウラの挨拶がとどめとなった。桃矢は、たまらず疑問を口にした。

「ゼクトールの閣僚には、年齢や性別に制限があるのですか？」

九人の委員長達、すべてが女子。宰相のジェベルが最年長。でも二十四才。

OLが一人。高校生が五人。中学生が三人。平均年齢、十六・八才。

つーか、日本の法律では、ジェベル以外全員未成年。

彼女たちが自分に仕えてくれる。嬉しい！ でも不安！

低い次元の狭間で揺れる桃矢であつた。

4・水着（後書き）

次回、5・最終防衛ライン。
なにか最終防衛ラインなのかw

誤字脱字の指摘・感想お待ちしております。
僕力ノの感想もお待ちしてまゝす！

5・最終防衛ライン

「疑問はごもつとも」

艶然と笑うジェベル。意味無くデヘヘ笑いを返す桃矢。桃果に足を踏まれた。

「ゼクトールは、主立った産業のない小さな島国です。小島嶼開発途上国として、国連に認定されています。政府財源は、国民の出稼ぎによる送金に頼っている次第です」

「だから、なんで若い子ばかりが……あ！」

あることに気がついた桃矢。そういえば、沿道で迎えてくれた国民の皆様方。全て女性ではなかったか？

「まさか？」

仮説が確信に変わる瞬間。

「まさか成人男子全員が、海外へ出稼ぎに出ている……とか？」

いいところを奪い去ったのは桃果。彼女の顔に張り付いた笑みが、紙のように薄っぺらい。

「その通りです。我がゼクトールでは、一家を支えるのは男の仕事。そしてゼクトールには主立った輸出産業がありません。ゆえに労働可能な男子全員、家族を残して諸外国へ出稼ぎに出向いています。ゼクトール人は実直勤勉、そして忠実な国民性で有名なので、引く手あまた。最近では主に中東方面での雇用が増えています」

ジェベルは肯定した。

他の委員長達も頷いている。彼女たちの父や兄は、遠い異国で身を粉にして働いているのだ。そして、年老いた祖父母のため、ある者は妻や子供達のために、またあるものは母や妹たちに、稼ぎのほ

とんどを送っているという。

「立派ね！ あたしの両親なんか、恥ずかしくて語れないわね。家族のために歯を食いしぼる。美しいわ！」

自分の世界に入り込む桃果。遠い一点を見つめている。

「まあ……、ここよりは美味しものや面白いものがあるので、それほど歯は食いしばっていないようですが」

「美しいわ！」

現実から目をそらし、オリジナルストーリーを完成させる桃果であつた。

「そしてもう一つ。ゼクトールの政治的慣習が関係します」

ジェベルの次の言葉を目で促す桃矢。

「ゼクトールの政治体系は、絶対君主制。王の権限は絶大です。よって、ゼクトールにおける閣僚とは、王の指示の元、各部門での実行機関にすぎません。つまり委員会。そして、国王が亡くなった場合、政治家と呼ばれる者達は、一斉に引退します」

大昔、日本や中国では、大王が死ぬと側近の者や使用人が殉職させられる。そんな話を思い出した桃矢。あれは大昔の風習。

ジェベルは言葉を句切つたまま、桃矢と桃果を交互に見ている。

二人の理解度を測っているようだ。

二人ともここまで付いてきていると判断したのだろう。ジェベルは、話を続けた。

「貴族と名乗るのはおこがましいですが、私たちは家ごとに各委員会を受け持っています。そして代々、長の地位を受け継いでいるのです。たとえば、我がオルブリヒト家が全委員会をまとめる、いわば委員会会長の家柄。そしてミウラのヴァイツ家が戦人の長、マーブルのミートン家が王家の倉を預かる家柄」

桃矢は、再び日本の歴史をひもといていた。大和朝廷の時代、家々によって、ある程度担当する役職が決められていたような？

いつものように桃果に視線を向ける桃矢。くりつとした可愛い目を見開いてジエベルの説明を聞き入っていた。桃果も驚いているようだった。

違う！ 彼女は、初めて聞くシステムとして驚いているのだ！

桃矢は、桃果は歴史がからきし駄目だったのを思い出した。

「国民総所得の低いゼクトールでは働き出す年齢が低いため、法律では十三才で成年と見なされます。ついでに言いますと、わたくしの祖々母は、十四才で宰相に就任したという経歴の持ち主です」
「ま、まあ、国の事情だよな」

一つの謎は解けた。のこるはもう一つの謎。

後で聞きにくいこと。いまなら勢いで聞ける気がする。

「その辺は理解できましたが、……みなさん水着なのは何故？」

漆黒の水着を着ているジエベル。あきらかにサイズが一つ小さい砲弾型に突き出したバストと相まって、勝手に視線が首下に移動するという男の性^{さが}に、さっきから桃矢は苦しんでいるのだ。

それだけならまだしも、タイトミニスーツを着込んだミウラ以外、同年代の女の子が下半身水着姿である。何人かはハイレグだ。おまけにゼクトール女性は、美人ぞろいでナイスバディ！

間違いを起こしそうでとても怖い。それ以前に桃果の仕置きが怖い。

不可侵の領域へ足を踏み込んだ感の桃矢。いろんな意味で緊張している。

「桃矢、鼻と唇の間が長くなってるわよ」

桃矢が鼻に手を当てる。それを見て、またもや笑いを堪える桃果。

「これはゼクトールの風習です」

ジェベルの答えは簡潔だった。

「元々は宗教上の理由からですが、王が変わると、みな一斉に衣を替えるのです。制服のデザイン選択は、新しい王にまかされます。つまり王の好みでいろんなタイプの制服が生まれるのです。トーヤ様の代に変わった今、制服もトーヤ様の趣向に合わせて替えるのが習わしです」

「え！　じゃ、その水着は先王の趣味？」

にこにこ笑いながら頷くジェベルの水着が黒光りしていて眩しい。「先々代は、上がセーラーで下がマイクロミニという制服を採用されていたそうです」

遠き過去に、勇者を見る桃矢。

「さて、トーヤ様におかれましては、どのようなデザインが好みでしょうか？　全員の分を揃えるには時間がかかります。お話ついでに、今ここで伺いしたいのですが……」

ジェベルの言葉に、桃矢は唾を飲み込んだ。

「ど、どのようなモノでも？」

これはアレだ。服という文化を手に入れた代わりに失った物を――
|。

「王の命令は絶対です。死ねと言われれば、喜んでこの命、捧げましょう」

ミウラが直立不動の姿勢で宣誓する。後ろに控える家臣団の女の子達も首肯してる。

「たとえば、……この国、暑いしね。……自分の好みというよりは、みんなの快適性を第一に考えてるんだけど……いやあ暑いよね？ 熱帯だし。……そこで提案なんだけど……」

「なんなりとご用命下さい！」

真剣に受けるミウラ。きりりとした眉がりりしい。

「それじゃ、上半身裸にな——」

そこから先は、桃果にネックブリーカーをかけられたので喋ることができなかった。

「乳房を出すのは恥ずかしい事ですが、王の命令とあれば仕方ありません。制服代が安上がりで済むのが救いです」

平然とした面持ちで肩から水着をずらしたすミウラ。ジエベルやノア達も頬を朱に染めながら、次々と肩を出しはじめた。

「ストップ！ ストップです！ 命令です、王の訂正命令！ 今のはナシ！」

ネックブリーカーを解かれた桃矢。解かれた意を解し、必死で訂正の弁を振るう。

「今のままで変更無し！ 僕と先代国王は趣味が一緒みたいですうつ！」

泣きながら、しかし、ギリギリのラインだけは守り通した桃矢であつた。

5・最終防衛ライン（後書き）

次回、6話・記念写真

かみんぐすうーん！

明日、昼に上げられそうだ。

6・記念写真

「このままでよろしいのですか？ トーヤ様！」

大きな声が閣僚の中から上がった。フリル付きの赤い水着が可愛い十六才の財務委員長、マープルである。

「ありがとうございます！ トーヤ様。財務を預かる者として心よりお礼申し上げます！」

両手を祈りの形に組み、目から涙を溢れさせるマープル。何度も頭を垂れる。

「え、泣くこと？ そんなに今の水着が気にいつ——」

桃矢の足を桃果が強く踏んだ。

「財務委員長が感謝することと言えばお金の話ですよ？」

桃果が肩で桃矢を押しつけて前に出た。笑顔のまま、しかし眉がつり上がっている。何かに気がついたようだ。

「制服を一時に何百着も替えるには、まとまった金額が必要よね？」
「あ、そうか！」

そこまで言われて桃矢も気付いた。桃果の後ろで。

気付くのが遅かった。気の付かない男と思われるかもしれないと軽い後悔が立つ。

それにしても、桃果は異様に頭の回転が速い。……桃矢の頭を押さえるため限定だが。

「桃矢は……いえ、桃矢様は、無駄に財政を支出すると言われてるのです」

「トーヤ様！」

花が咲いたような笑顔を浮かべるマープル。

そして口々に謝意を唱える女の子達……もとい、各閣僚。桃矢、モテモテである。

桃果の機転が桃矢の面目を立たせた。感謝！ した瞬間を計ったかのように、ちらりと

振り返る桃果。目が……イタチ目をした瞳に「貸し」の二文字が浮かんでいた。

引き替えに、桃矢は女の子……もとい、全閣僚の信任を得たと考えればいいはずだが、それにしても借り入れた金額が大きすぎる気がする。

「ではみなさん、せめて胸の谷間だけでもお出ししましょうか？」
ジェベルは胸に手を掛けたままだ。真剣な顔をして同僚達に相談を持ちかけた。

「谷間かー、……ジェベルさんに比べられると、ちょっと辛いんだよなー！」

国土交通委員長のエレカが早速行動に出た。ボーイッシュな彼女。蒼い競泳水着の胸元に手を乱暴に差し込んで、ごそごそしている。何をつかんでいるのだろうか？

「……」

無言でペールブルーの水着をはだけていくミラ。マーブルの言葉を額面通り受け取ったのだろう。薄水色の目が虚ろなのは動揺のせいかな、それとも元々の性格によるのか？

「トーヤ様の命とあらばこのミウラ、軍人として一命をも投げ打ちましょう！」

顔を朱に染め、勢いよく胸元をはだけるミウラ。彼女は、十七才

とは思えない質量感の持ち主だった。

あつという間に中高一貫校の女子更衣室と化した国王執務室。

どこの神様かわかりませんがありがとうございます。桃矢は神の奇跡に感謝し、一生ついていくことを誓った。

「いえ、それほどでも」

「え？」

桃矢の思考を読んだとしかいえないタイミングの相づち。いったい誰が……。

「待ちなさいっ！」

大声を張り上げたのは桃果。神の威光を地べたに引きずり下ろす悪魔の咆吼！

顔を赤らめた者、自慢顔やどこ吹く風の者、全てが脱衣を中断。

桃果に視線を向けた。

「国王がいつ、ぱいぱいを放り出せと言いましたか？」

怖いくらいに平常で冷徹な声を出す桃果。

「ふんっ！ トーヤ様のお付きだかなんだか知らねえが、桃果様？ あんた、胸の谷間もねえ小娘なのかい？」

可愛い谷間を放り出したまま、詰め寄るエレカ。腕を前に組んで寄せ、強調している。

「ふっ！ よくいるのよね。胸を放り出すだけが色気と勘違いしてる小娘って」

両手の平を上に向け、ヤレヤレのポーズを作る桃果。

「んだとおー！」

袖まくりのポーズで詰め寄ろうとしたエレカ。それを押しとどめるミウラ。

桃果はエレカを挑発するように、芝居つけたつぷりに話し始めた。
「あらあら、見せた後はどうするの？ それ以上、なにを見せるの？」

「何って……そ、そそそ、それをここで言わせるのか？」

額に汗を浮かべるエレカ。言葉に詰まる。

言ってくれ、その単語を！ 神よ、魔神に負けるな！ 神に祈る桃矢であった。

「お下品ね。おほほほほ！」

桃果は芝居気たつぷりに笑いながらクルクルと回転。ビシリと人差し指をエレカに突きつけて回転を止めた。

「見せてしまえばお終い。見せずに魅せる、という意味が解る？」

桃矢陛下は脱げとはおっしゃってない。その意味、わかるわよね？

男と女の高等な遊びよ。まさか、エレカ委員長ほどの女性が、桃矢国王陛下をそこら辺の男と同列に扱ってないわよね？」

出来の悪い生徒に教える女教師よろしく、人差し指を立て、ゆっくりと左右に振る桃果。

「な、なるほど！ わたしは恐れ多くもトーヤ様を見くびっていたことに……くっ！」

エレカは力なく床に膝をつき、うなだれる。見かけや態度に似合わない素直な性格だった。

一方、桃矢も神の無力さに絶望し、背中を丸めてうなだれていた。

「ハイハイ、みんな元通り水着をなおして！ 規律の乱れは服装から。注意しましょう！」

着衣を乱す音と直す音。同じ衣擦れの音であるのに、あまりに大きな違い。自分の思考力が回復していく様に無情を感じる桃矢。ま

た一歩大人になった気がした。

そして、大人になった桃矢は開き直っていた。

「もう一つ疑問があるんですが」

ものはついで。聞くは一時の恥聞かぬは一生の恥という諺が、桃矢の頭の中をぐるぐると舞っている。

「これも最初から思ってたんですが、みなさん、なんで日本語を流暢に話せるんですか？」

「そつえばそうね。いままで気にもかけなかったけど」

剛気な桃果はさておき、ここまでの会話、全て日本語である。

「トーヤ様が次期国王と承認された時、ゼクトールの第二公用語を日本語に制定したのです。それからの我らは、一日二十四時間を二十五時間の猛勉強をして日本語をマスター致しました」
皆、一様に胸を反る。ジェベルはもとより全委員長が胸を突き出す。九対十八房の誇り。

壮観である。

神はまだ、桃果に滅ぼされたわけではなかった。桃矢は神の無事に安堵した。

「わたくしは無事です。どうかご安心を」

今、桃矢は確かに神の声を聞いた。

「ではこれより、新政権誕生による記念写真を撮りまーす！ その後はみんなそろって朝食ですよー！ はい並んで並んで！」

ジェベルの号令の元、呆然とする桃矢を中心として、わらわらと集合する委員長達。

ちやっかりと桃矢の隣に位置し、爆笑中の桃花を筆頭に、みんな笑顔で写真に収まったのだった。

6・記念写真（後書き）

次回、「王座」

王の権限とは？

王の栄光とは？

…「玉座」になるかもしれない。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0753z/>

悪役上等！ 武装戦闘国家ゼクトール

2011年12月6日12時57分発行